

---

# 月下に踊るピエロ

橘伊津姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月下に踊るピエロ

### 【Zコード】

Z5737V

### 【作者名】

橋伊津姫

### 【あらすじ】

「月夜のサークス」って知ってるかい？満月の夜に一夜だけ、テントをかけるサークスのことさ。だけど、そのサークスに行くには特別なチケットが必要なのさ。

拙サイト「皓月迷宮」にて公開しております。

「月夜のサークル」って、知ってるかい？

満月の夜にだけテントを掛ける、不思議なサークルの事。

そのサークルに行くには、新月の夜に配られるチケットを手に入れなくちゃいけないのさ。

でもね。

チケットは誰でも手に入れられるものじゃないらしいぜ。

ボクに、そんな話を教えてくれた友達のマックは、この前の満月の夜から姿が見えなくなつた。

見ろよ、カール！ ほら、チケットだ。『月夜のサークル』のチケットをもらつたんだぜ！

ものすごく嬉しそうな顔をして、手に入れたチケットを見せてくれたのに。

マックは「月夜のサークル」に行つたんだろうか？

ボクは友達の行方が知りたくて、学校の先生やクラスメイトに頼んで、一緒に探してもらおうとした。だけど、みんな変な顔をして聞き返してくる。

「マック？ 誰だい、それは？」

先生、何言つてんだよう？ マックだよ、マクレイン・ホートマンだよ、先生！

「おいおい、カール。君こそ、何を言つてるんだい？ うちのクラスにマクレイン・ホートマンなんて生徒は、いやしないじゃないか」クラスメイトの誰に聞いても、返つてくる言葉は同じ。

「カール、変な夢でも見たんじゃないのか？」

「マックって誰だよ？ 他のクラスの奴かい？」

「違うよ！ 一緒にクラスだつたじゃないか！ ボクの隣の机だつただろう？」

「おかしな事、言つたなよカール。お前の隣の席は、ずっと空いたままだぜ」

誰もマックの事を憶えていない。みんな、マックの事を忘れてる。ボクはマックの家へ行った。ボクの家からワンブロック先。赤いレンガのアパートマン。何度も泊まりに行つたし、マックだつてボクん家に泊まりに来た。ママ同士も友達だ。階段を駆け上がって三階がマックの家だ。

ベルを押して、ドアを叩いて、ボクはマックのおばさんを呼んだ。

「あら、カールじゃないの。そんなに慌てて、どうしたの？」

マックがいなくなつてから何日も経つのに、マックのおばさんは笑顔だつた。ボクを見て、いつもと変わらず笑つたんだ。

「おばさん、マックは？ マックから何か連絡はあった？」

ボクの言葉におばさんの顔が固まつた。

「マック？ マックって誰の事？」

何て事だ、おばさんまで！ 自分の胸の中で、心臓のリズムが狂い出すのが分かつた。息が苦しくなる。

「おばさん、マックだよ！ おばさんの息子のマクレインだよ！」

「変な事言つ子ねえ。つうに子供がいなのは、カールも知つてるでしょ？」

ママなのに！ マックのママなのに！ なのにおばさんは、マックの事を憶えてないんだ。

「おばさん、どいて！」

ドアの前のおばさんを押しのけると、ボクは家の中へ入つた。

「カール！ 一体全体、どうしたつて言つの…？」

背中におばさんの声を聞きながら、ボクは居間を通り抜けた。一番奥にある部屋がマックの部屋だ。何度も来た。

見覚えのあるドアを、力一杯開く。そこには。

「そんなん……！」

何もない。マックの物は何もなかつた。色々なガラクタや箱が押し込まれた部屋。マックの部屋のはずなのに、そこにはマックのい

た様子はない。

「そこはすつと前から、物置に使つていい部屋よ」  
ドアを開けたまま突つ立つてゐるボクに、おばさんが声をかけて  
来た。

「カール、本当にどうじゅうやつたの？ うけに子供がいるなんて、  
急に変な事言い出して」

ボクは口の中で「ゴーゴー」と言い訳すると、マックの家を出た。  
どうしよう。誰もマックを憶えてない。最初つからマクレイン・  
ホートマンなんていなかつたように。

本当に 本当にマックはいなくなつてしまつたんだ。

「月夜のサークス」だ。マックはサークスに行つたに違ひないんだ。  
そして、そのままマックは帰つて来なかつた。あやしいのは「月夜  
のサークス」だ。

家に帰つてから、自分の部屋に閉じこもつて、ボクは考えた。どう  
すれば、ボクの友達を取り戻せるのか。

マックはボクの大事な友達だ。だから、ボクが助け出さんだ。

マックは「月夜のサークス」に行つた。マックはサークスから帰  
つて来なかつた。ボクの頭の中で、同じ考えがグルグル回つてゐる。  
そうだ。マックはきっと「月夜のサークス」にいるんだ。でも……

……

「でもどうやつたら『月夜のサークス』に入れるんだろう？」  
マックは何て言つてつたつけ？ 思い出せ。思い出すんだ。

確か「月夜のサークス」に入るためのチケットは、新月の夜に配ら  
れるつて。それを手に入れなくつちや。

窓から空を見上げる。星が光り始めた夜空に、猫の爪のようによく  
く尖つた月がかかつてゐる。新月は明日か、明後日の夜だろつ。  
「探しに行こう。絶対に、ボクがマックを助けるんだ」

次の日の夜。

空は曇っていて、月が出ているのかないのか、ボクのいる場所からでは見当がつかない。

夕食の後、自分の部屋に戻ったボクは、マックを探しに行く準備を始めた。

履き慣れたスニーカーに、小さなリュック。なかには町の地図とチョコバー、ロープと折りたたみのナイフ、ペンにライト。ベッドに入ったふりをして、ママが様子を見に来るのを待つた。静かに待っていると、ドアが開いてママが顔をのぞかせた。ボクがベッドで大人しくしているのを確かめると、灯りを消してドアを閉めた。階段を降りて行くママの足音が聞こえなくなつてから、ボクはベッドから滑り出る。

そつと窓を開くと、音を立てないように注意しながら外へ出た。屋根の上まで張り出した木の枝を伝つて、庭に降り立つ事に成功した。

「ママ、ごめんね」

眠っているはずのママに向かつて小さく咳くと、ボクは走り出す。途中に、茂みの陰に隠しておいた自転車を引っ張り出し、夜中の町へとこぎ出した。

どこへ行けば「月夜のサークス」へのチケットをもらえるのか、どんな人が配つてゐるのか、何も分からぬ。ただがむしゃらにペダルをこぐ。町中を走り回り、何としても、チケットを手に入れるつもりだった。

夜中の町は、昼間の町とは全然別の表情をしている。街灯に照らされた道は、それ程先まで見通せるはずもなく、どこか違う世界へつながつていそうに見える。

行き交う人影はなく、道端に止められた車は、うすくまつた見知らぬ動物のようだ。灯りの消えた建物の窓は、いくつもの虚ろな目みたいにボクの事を見下ろしている。

ボクはあてもなく、町中に自転車を走らせた。ストリートを過ぎるごとに、リュックの中の地図に印をつけていく。夜間の見回りを

している警官に会わないように、走る道も考えなくちゃいけない。

公園に自転車を止めると、水飲み場のコックをひねって、流れ出た冷たい水で顔を洗つた。汗ばんだ肌に触れる冷気が気持ちいい。

「ふうーっ」

ブルブルと頭を振つて、髪と顔から水を飛ばして息をついた。

「ずい分と走つた気がするけど……」

ボクは噴水の縁に腰かけて、リュックの中から地図を取り出して広げた。

「あとは、どこに行けばいいんだろう?」

通り過ぎて来たストリートの名前にペンで丸をつけてから、大きく伸びをする。地図をたたんでリュックに戻すと、チョコバーを手に取つて袋を破つた。

「今夜は新月じゃなかつたのかなあ」

チョコを頬張ると、ため息をついて夜空を見上げた。雲に覆われた空には、星一つ出てはいない。

「間違いじゃないよ。新月は今夜さ」

口の中のチョコを飲み込んだ途端、背中からいきなり声をかけられた。

「ンツ！ ングフッ！」

驚いたせいで、チョコが変な方へ入つてしまい、ボクは激しく咳込んだ。

「ああ、悪い悪い。ビックリさせちゃったかな。大丈夫かい？」  
胸を叩いて何とか塊を飲み下し、咳込んでしまったために涙目になつた顔を、おどけた調子の声の方へ向けた。

月のない夜空。薄ぼんやりとした街灯の光。人気のない真夜中の公園。水の止まつた噴水の彫像。美女に寄りそう一角獣の背の上。

「え？ 何で？」

ピエロだ。ピエロがいる。一角獣の背中で逆立ちし、片手をヒラと振つている。

「何で、こんな所にピエロが？」

ポカソとクチを開けたまま、宙返りなどを披露していくピエロに  
ボクは見入ってしまった。

「君はカールだろ？ マックの友達の」

ローンと弾んで噴水の縁石に飛び移ると、ボクの目の前でおじぎをして見せた。

「どうしてボクの事を？」

噴水の縁をお尻でズリズリと移動しながら、ピエロに向かって尋ねると、彼はズイッとボクに顔を近付けた。メイクの描かれたマスクの下で、ピエロの目が三日月のように細くなつたのが分かつた。笑つたんだ。訳も分からず、背筋がゾツとする。

「わたくしめはピエロ。『月夜のサークス』の浮かれ道化。この町に住む子供の事は、何でも知つておりますよ」

クルリクルリとトンボを切る。

「どんな名前か。どこに住んでいるのか。どこに学校に行つているのか。それを知つておくのが、オイラの仕事。何てつたつて、オイラはサークスのピエロだかんね」

そう言つと、どこからともなく取り出した五つのボールを次々と放り投げながら、噴水の縁から飛び降りた。

「月夜の……『月夜のサークス』！？ 本当に？」

「いかにも我輩は『月夜のサークス』に仕える道化。人に笑われるが仕事のピエロでござい」

やつとだ。やつと見つけた。「月夜のサークス」のピエロに会えたんだ。これでチケットを手に入れる事が出来るんだ。

「ボク、ボク、どうしてもチケットが必要なんだ。友達を探しに行かなくちゃいけないんだ」

勢い込んで身を乗り出すボクの鼻先で、ピエロの持つていたボルが音立てて破裂した。煙の中から現れた指には、七色に光る不思議なチケット。そのチケットにボクの目は釘付けになる。

「そ、そのチケット！」

ピエロはボクの目の前でチケットをヒラヒラさせながら、ボクの

様子を楽しんでいるように見える。

「このチケット、君にあげてもいいよ。カールはマックの友達で、マックはカールの友達だからね」

そう言つて、チケットをボクの方へ差し出す。慌ててチケットを受け取るうとすると、スイッチと手の届かない所へ遠ざけ、マスクの下から意地の悪い笑い声を響かせる。

「あげてもいいけどさ。でも、条件があるのさ。何てつたつて『月夜のサークス』の入場チケットだよ。誰でも手に入れられるものじゃないからね」

スケートリンクの上で踊るスケーターのように、石畳をつま先で滑るピエロ。華麗にターンを決める時、これまでとは違う低い声で、ピエロはボクに語った。涙のペイントされた仮面に空けられた穴の奥から、じつとボクを見つめている二つの目がある。

「いいかい。このチケットを受け取った事を、絶対に大人に話さない。このチケットを、他の誰かにあげてもいけない。サークスに来る時は、一人で来なくちゃいけない。このチケットが使えるのは、次の満月の夜だけだよ。それを過ぎれば、チケットはただの紙に戻るからね。よく憶えておくといい」

ゆつくりと差し出されたチケットを、ボクは震える指で受け取つた。チケットがボクのものになつた瞬間、ピエロは高らかに宣言した。

「さあこれで、君は『月夜のサークス』の観客だ。さつきの約束を忘れるんじゃないよ。興行は次の満月の夜、一度きり」

信じられない思いでチケットを見つめていたボクは、ある事に気が付いて顔をあげた。ピエロは公園の石畳の上を滑るように、彈むように踊りながら遠ざかって行くところだった。

「待つてよ！ 場所は？ サークスはどこに来るのさ？」

そうだ。ボクはサークスの来る場所を知らない。チケットを手に入れても、当日、サークスに行けなかつたら意味がないんだ。

「そいつあ、今は言えないね。まあいお月さんが昇つたら、場所

はチケットが教えてくれる。それまで待ちな

そう言い残して、ピエロは街灯の光の外へと消えて行つた。

あのピエロは、一体何者だつたんだ？ 本当に「月夜のサークス」のピエロなんだろうか？

手の中にあるチケットは、さつき見た通り七色に光つている。今あつた事は、夢じやないんだ。「これで……これでマックに会える。『月夜のサークス』に行けるんだ……」

チケットを手に入れてからのボクは、次の満月の夜が待ち遠しくてソワソワした。

皆は相変わらず、マックの事を忘れたままで。だからボクも、マックの事を口にしないようにした。大丈夫。もう少しでマックを助け出せる。

ボクはチケットをカバンの中に大事にしまい込み、毎日持ち歩いた。学校に行つている間、家に置いておくなんて出来なかつた。万が一、ボクの部屋にママが入つて来たりして、チケットを見つけられたら大変だ。

あのピエロと交した約束。『手に入れたチケットの事は、絶対に大人に話してはいけない』。ママに見つかつたら、サークスに行けなくなつてしまつ。

ボクの様子が変なのを、誰にも気付かれてはいけない。次の満月を待つてアせる気持ちを押し殺して、毎日を過ごしていった。

正直言つて、どうやつて日々を過ごしていたのか、良く憶えていない。朝起きて学校へ行き、授業をこなして家へ帰り、目の前に出された食事を味も分からず口へ運び、ベッドに入つて眠りに就く。その繰り返しだつた。ただベッドに入る前、窓から空を見上げて月を確かめ、カレンダーに印をつける事だけは忘れなかつた。

二十八日周期で満ち欠けを続ける月の形。見上げるたびに、夜空の月は確実に太つていぐ。もう少し、もう少しだ。早く、早く、月よ、もつと早く！

ボクがヤキモキと時を過いでいるうちに、月は半月を越え、丸くなつていった。そして、いよいよ。

「明日だ。明日の夜が、満月だ」

カレンダーに印をつけ、ボクは喜びを込めて呟いた。

その日のボクの様子は、誰から見てもおかしかったかも知れない。朝食の時もシリアルのボウルをひっくり返したり、ミルクのグラスを割つてしまつたり。落ち着かないボクに、ママは何かあつたのかとしきりに聞いてきた。ここでママに怪しまれたら、今夜サークスに行けなくなつてしまふかも知れない。それだけは、どうしても避けなくちゃいけない。

「月夜のサークス」に行けるのは、満月の今夜だけなんだから。しどろもどろに言い訳をすると、ボクは家を飛び出した。これ以上、ママの前でおかしな行動をとる訳にはいかないから。

学校の授業なんか、耳に入らない。ただもう時間と、カバンの中にあるチケットの事が気になつて気になつて仕方がなかつた。ランチも何を食べたのか覚えてない。もっとも、この数日、食べ物の事なんか考えてなかつた。

授業中、何度か先生に指名されたけど、どれ一つとしてまともに答えられなかつた。授業をぜんぜん聞いていなかつたのだから、当たり前と言えば、当たり前だ。

終了のベルが鳴り響くと、カバンを引つつかんでボクは教室を飛び出した。クラスメイトの幾人がボクに向かつて声をかけてきたけど、そんなものに返事をしているヒマはない。

スクールバスに乘る事も考えたけど、誰かに様子がおかしいことを気付かれたくなかつたし、ジツと座つていられる気分でもなかつたので、家まで走つて帰る事にした。第一、ぐだらない世間話なんか聞かされたくなかつたし。

息を切らして家に帰り着くと、ドアには鍵がかかっていた。ママは買い物にでも行ったのか、留守だ。よし、今のうちに必要な物を

用意してしまおう。

ボクはキッキンへ向かうと、冷蔵庫の中からハムやチーズ、リュックに入れられるような果物を取り出して抱えると、自分の部屋に駆け込んだ。ベッドの下に隠してあつたリュックの口を開けると、中に入っている物を確認する。

ロープ、ペンライト、小さなナイフ、そして食料。他に利用できると思った物は、できるだけリュックに詰め込んだ。学校カバンの中に入れておいた七色のチケットも、ジャケットの胸ポケットに移す。今夜こそ、このチケットの出番なんだから。

買い物から帰つて来たママが、ハムとチーズがなくなっているけど知らないかつて、聞いて来た。ボクは何でもない顔を作つて、お腹が空いてたから食べちゃつたつて答えたけど、信じてもらえたかな？

朝からボクの様子を見て何かを勘付いていたかも知れないママ。「そうなの」って言つてたけど、妙な顔でボクのを見てた。

ドキドキする。ただ一枚の紙切れでしかないはずのチケットが、胸ポケットの中でとてつもなく重く感じる。

「ゴメンね、ママ。どうしてもガマンできなくなつて。晩ご飯に使つはずだつたんなら、ボク、買いに行つて来るよ」

大丈夫、ちゃんとと言えた。ホッと息をはいてママを見ると、ママは仕方なさそうに肩をすくめて、いいわと言つた。

「その代わり、明日の朝はチーズトーストのチーズ抜きと、ハムなし目玉焼きだからね。それから、夕食前に食べたんだから、食事は少なめよ」

「はーい」

本当にハムとチーズを食べた訳じやなかつたけど、そもそも、緊張していて食欲もなかつたし、ちょうどいいや。

運のいい事に、今夜はパパの帰りが早い。うちを抜け出した時に、遅く帰つて来たパパと出くわす危険性はなくなつたつて事だ。少し安心した事で、夕食の席では朝のようなくまをせずに済んだ。

ジャケットの中にあるチケットの存在を、痛いほど感じながら夕食を終えて、ボクはキッキンを後にした。パパとママにお休みのキスをして、階段に足をかけたボクの耳に心配そうなママの声が聞こえてきた。

「ねえ、あなた。最近、カールの様子がおかしいのよ。今朝だつてね……」

心配かけて、ゴメン。今夜だから。今夜が終われば、全部が元に戻るから。だから、もうちょっとだけ見逃して。

部屋に戻ったボクは、荷物をひとまとめにしてベッドの下に押し込むと、ベッドにもぐり込んで口を開じた。パジャマじゃなくて服のままなのを気付かれないように、首の下まで毛布を引き上げるのも忘れなかつた。

いつものように、ママがぼくの様子を見に来る。ベッドの中の僕を確かめると、部屋の灯りを消してドアを閉める。ドア越しに、ママのついたため息が小さく聞こえた。こんなにボクのことを心配してくれるママの事をだましているみたいで、苦しくなる。

階段を降りて行くママの足音が聞こえなくなつてから、毛布から抜け出したボクは、隠してあつたリュックを背負つて窓を開けた。

「ごめんね、ママ、パパ」

そつと弦じてボクは部屋を抜け出した。この前の新月の夜と同じように、屋根から木の枝を伝つて庭へ降り立つ。通りへ出て、家が見えなくなるまで走つてから、空を仰いで息を吐いた。

「ここまで来れば、見つからないかな」

息が静まるのを待つて、胸ポケットからサークスのピーポロモーリーしたチケットを出してみた。チケットは、もひつたときと同じように、不思議な七色をしていた。

「……ピーポロはチケットが場所を教えてくれるって言つてたけど……。どうすればいいんだろう?」

もつと良く見ようと、ボクはチケットを手にかざした。街灯よりも満月の方が強いくらいだ。

「月夜のサークル」と印字されたチケットは、満月の光を浴びて輝き出した。

「え？」

驚いた拍子に、ボクの手からチケットが滑り落ちた。ヒラヒラと踊りながら、チケットは通りの石畳の植えに舞い降りた。そしてそのまま光り続ける。

「……やっぱり、光ってる」

明るく光るチケットを拾い上げようとしゃがみ込んだボクは、石畳の上に妙なモノを見つけた。通りの向こうまで、チケットと同じ七色の光の粒が続いていた。

「もしかして、コレが……？」

あのピエロが言っていた「場所はチケットが教えてくれる」っていう事か！ ボクはチケットを拾い上げると、道に光る七色の印をたどって歩き出した。ボクの歩調はどんどん早くなり、とうとう走り出した。

通りを抜け、公園を抜け、光の粒はボクを誘つ。学校の前を過ぎ、教会の前を過ぎ、町外れの広場へと道は続いていた。足許の光る道標から目を上げると、いつもは何もない広場に、見た事もない程色鮮やかで、見た事もない程巨大なテントが張られているのに気が付いた。

「あれが……。あれが『月夜のサークル』のテントなんだ……」

ボクを導いて来た光の粒は、サークルのテントの入口へと消えていた。入口の前に立つと、人間を呑み込む巨人の大きな口のように、暗い穴が中へと続いている。ボクはチケットを握り締め、テントを見上げて立ち尽くした。

マックを助け出すために、ボクはチケットを手に入れた。マックのために、ボクは「月夜のサークル」を探し出したんだ。なのに。

。いざサークルのテントの前に立つと、すくんでしまつて足が動かない。一步を踏み出そうにも、心が震えてしまう。

「どうしようつ……。マックを助けるために来たのに……」

怖い。足がすくむ。やつとここまで来たのに、動けない自分がく  
やしくて、それでもやつぱり怖くて、涙が出てくる。

その瞬間、テントに灯りが点いた。夜の深い紺色の空に、まぶし  
い紅白の花が開いたように思えた。テントの周囲につけられた数百  
個とも見える電球に、一斉に光が入ったのだ。

驚いてテントを見上げているボクの耳に、いつぞやのピロ口の声  
が響いて来た。

「さあさ、お立ちあい。満月の夜にだけお目見えする『月夜のサー  
カス』だよ。チケットを持つている子は、入っておいで。ここは子  
供しか入れない、不思議の世界の入口だよ」

テントの内にも灯りが点いたのだろうか。先程までは真っ暗だつ  
た入口の奥に、光が見える。

「さーあ、急いで急いで。もうすぐサークスが始まるよ。この地の  
興行は今宵限り。急がないと、見逃しちゃうよ」

スピーカーを使っているわけでもないのに、どうしてだか、その  
声は良く通る。ボクはゴクリとツバを飲み込むと、心を決めて足を  
踏み出した。おつかなびっくり進んで行くと、入口の幕の途切れた  
所に誰かが立っていた。近付いて行くと、それが小柄でやせたお婆  
さんだと分かった。

「はい、いらっしゃいな。チケットはお持ちかい？」

ボクは黙つて、汗で少し湿つたチケットを渡した。七色に光るチ  
ケットを受け取つたお婆さんは、目を丸くしてボクの事を見た。そ  
してちょっとだけ、唇の端を吊り上げて笑つた。

「このチケットを手に入れられたとは、運がいい子だねえ。さあ、  
お行きな」

もぎつた半券を返しながら、お婆さんは席のある方を指差して見  
せた。ボクはモグモグと礼を言い、教えられた場所へ向かった。チ  
ケットに記された座席番号を確かめ、ボクは自分の席に座つた。  
ようやく気持ちが落ち着いてから、周囲を見回してみる。白いラ  
イトがいくつも交差して、中央にあるステージサークルを照らして

いる。観客席は薄暗く、少し離れてしまえば他のお客様の表情なんて分からぬ。それでも、少なくない数の座席がうつまつているよう見えた。

「お待たせいたしました、皆様方！　これより『月夜のサークル』、開幕でござい！」

頭の上からアナウンスが鳴り響き、それと同時にライトの影になつていた場所から、カラフルな布を手にした四人の女の子が飛び出してきた。

女の子達は同じ髪型をして、同じ衣装を身につけている。手に握られた布は四色。赤、青、緑、黄の布が、ライトの中でなびき、ひるがえり、波打つ。ステージを所狭しと舞い踊つていた女の子達四人は、やがて大きくジャンプするとサークルの中央に降り立つた。ゆるやかに広がつたカラフルな布がステージサークルを覆い隠して爆ぜた。

ボンッ！　という大きな破裂音と煙。そして煙の中から降り注ぐ色とりどりの紙吹雪が、観客席にいるボク等の視界を染めた。一瞬そちらに気を取られ、あわてて元の場所に視線を戻せば、ステージの上に女の子達はおらず、代りに浅黒い肌をした大男が立つていた。彼の足許には金属のように光る巨大な蛇が。あまりの大きさに、子供達が息を呑む音がいくつも聞こえてきた。

大蛇は鎌首をもたげると、男の足首に滑り寄つた。蛇が足を噛むのではないかと、舞台を見つめている誰もが思つていた。シンと静まり返つたテント内には、蛇のウロコのこする音まで聞こえそうだ。だけどボク達の予想に反して、蛇はおとなしく大男の足にスルスルと巻き付き、体を昇つて行く。腰を伝い、腹を伝い、細い炎のような舌を吐きながら、蛇はとうとう大男の肩にまで届いた。

大男の顔の横で頭を振る蛇は、まるで何かを囁いているようにも見えた。蛇が男の肩に鎌首を落着けると、それまでジッと立つていた男が動いた。体に大蛇を巻き付けたまま、危なげもなく歩き出す。その動作には、巨大な蛇が体を締め付けている事なんか感じさ

せないほど、スムーズなものだった。

ステージサークルをぐるりと回り、自慢の筋肉を見せ付けるようにポーズを決めてみせる。観客席の前を一通り回り終わつた大男は、舞台の中央まで戻つた。そして深く息を吸い込むと。

「わあわあわあ！」

「キヤアアアアツ！」

客席のあちこちから悲鳴があがつた。大男の口から、テントの天井まで届きそうな勢いの大量の炎が吐き出されたからだ。

炎は舞台一杯に広がり、客席に座っているボクでも熱を感じる事が出来る程だつた。怖さで顔をそむけたボクの頬を、何か柔らかいモノがかすめた。

「……何？」

ヒラヒラと漂うソレを手に取つて見てみると、ピンク色をした花ビラだつた。見上げれば、吹き上がる炎の中から色んな花ビラが湧き出している。大きなモノ、小さなモノ、白い花、赤い花、黄色い花、見た事もない色の花。他の客席の子供達 そう、お客はみんな子供だ も次々と手を伸ばしている。炎の中から生まれたと言うのに、手の平の上の花ビラには焼けコゲ一つなかつた。

大男の吐き出す炎は休む間もなく、一体、いつ呼吸しているのかとボクは心配になつた。空中を漂つていた花ビラは、テント内の風に乗つて集まり、そしてビデオの逆回し再生を見るように花の形になつていつた。どのような仕掛けになつてているのか、目を見張るボク等の視線の先で、花の中心部から何かが生まれ出た。花と同じく、色とりどりの小鳥達。

かと思えば、炎の中からは別のモノが現れる。全身に金色の光をまとつた、人差し指ほどの大きさの人間だ。……いや、違うのかな？ あんなに小さな人間なんていないはずだし。それに、あの背中で動いている透明な翅は？ トンボのように薄い四枚の翅。例えるなら「ピーターパン」に登場するティンカーベルのようだ。

いつの間にかステージの上から大男の姿は消え、テント中に広が

つていた炎も静まっていた。何と不思議なサークスなんだろう。ボクの目も心も釘付けになっていた。この時のボクは、マックの事を完全に忘れていた。それほど「月夜のサークス」はボクを魅了したんだ。

初雪のよう<sup>バイコーン</sup>に白い一角獣にまたがつた美しい女性と、夜の闇のよう<sup>バイコーン</sup>に黒い一角獣に乗つたたくましい男性。お互いの乗る獣を寄せたり離したりしながらの曲芸。

高く作られた柱の上を、逆立ちしながらピヨンピヨンと渡つて行く子犬達。自由自在に体の曲がる女の子に、火の輪を飛び越える、頭の二つある巨大なトラ。オリの中で牙をむく半人半蛇。空中ブランコで見事なアクロバットを見せる、一人の若者。

命綱もない高所に張られたロープの上で身軽に踊つているのは、一番最初に出てきた四人の少女だ。衣装の裾から見え隠れするシップが動いているように見えるのは、ボクの氣のせいだろうか。

息継ぐヒマもないくらい、サークスの演目は次々と変わり、本の中やおとぎ話の中でしか聞いた事のないような生き物が現れる。テントの中に充満しているのは、拍手と歓声、驚きと恐怖と期待に彩られた子供達の声と熱気。

どの顔も、こう言つているように見える。

「もつと。もつと、このショーを見てみたい」

「いつまでも、この世界の中にいたい」

そしてボクもきっと、周りの子供達と同じ顔をしているに違いない。

小人と巨人のパントマイム、ヒョウに変身する女人、垂直に伸びたロープを伝つて踊るダンサー。その全部から目が離せない。

ライトが交差するステージサークルには、青い水をたたえた大きな水槽が引き出された。中には一人の男性がいて、スイスイと泳ぎ回つたり、水面にジャンプしたりしている。腰から下が緑色に見えるのを、ボクは最初、水着をついているんだと思ってた。だけど、ジャンプするたびにライト光を反射して、キラキラと輝いているア

レは。

「ウ、ウロコだ……」

男性の腰から足の先まで、エメラルド色のウロコに覆われている。つま先に指はなく、平べつたく魚のヒレのようになっている。良く見れば、耳の下から首の脇を通つて肩のあたりまで、肌が開いたり閉じたりしている。

あれ？ でも、もしかしてエテか？

本物なのか？ いや、まさか……。でも、二人とも水の中で苦し  
そうな様子はないし。やっぱり、作り物なのかも。

水槽の外にいたスタッフが、手に持つた一振りの剣を水の中へ投げ入れた。沈んでいく剣をしつかりと掴み、水中の二人は舞うように刃を合わせ始めた。首筋の肌の切れ込みが開くたび、いくつもの泡が吐き出されては昇つて行く。

もうずい分と長い間潜っているし、あんなに激しい動きをしてい  
るのに、どうして苦しくないんだろう？ 剣を握つてから、一人は  
一度も水面に顔を出していない。息を止めているようには見えない。  
やつぱり、本物の半魚人なのか？

もつと良く見ようと座席から身を乗り出すボケの肩を、誰かの手が後ろから掴んだ。

- ツ ! ? 「

完全にステージに意識を集中していたボクは、いきなりの事に声にならない叫びをあげた。胸の中で跳ね回っている心臓が口から飛び出しそうになるのを、必死で抑えつけて振り返ると、ボクの後ろに立っていたのは入口にいた小柄なお婆さんだつた。

よ一堺や「」おしてた裏で堺やに「用た」てお人かお待ちた

そう言つて、骨張つた指で通路の奥を示した。目をこらせば、舞台裏にでも続くのだろうか。カーテンのかかつた、小さな出入り口

があつた。

「待つてるつて、一体誰が？」

「そんな事は、行けば分かるさね」

「深くかぶつたフードのせいで、どんな表情をしているのかは分からぬ。でもボクには、フードの下のお婆さんの表情が分かつた。きっと、冷たく笑っているだろ。」 どうしてだか、ボクにはそう思えた。

出入り口へ向かつて歩き出したボクの事を、誰も見ていない。観客席の子供達は、完全に舞台に心を奪われている。

カーテンをぐぐり、ボクは暗い舞台裏へと足を踏み入れた。ステージで使うものらしい大道具が積み上げられ、まるで迷路みたいだ。ぼんやりとステージからもれてくる光で、どうにかぶつかる事なく進んで行く。

舞台裏の空間は、思ったより広かつた。ステージで使うための道具や装置、場合によつては動物を準備するのだから、当然なのかもしないけど。それにしても広い。

何に使うのか分からぬ道具や箱の陰から、生き物の息づかいが聞こえてくる。そんな気がした。

「一体、どこまで行けばいいんだろ?」

歩いても歩いても、誰もいない。得体の知れない闇は濃くなつていくように思え、ボクの内にある恐怖心も大きくなつていく。

そのうちに、自分がどこにいるのかも分からなくなつてしまつた。

「ここは……どこなんだ?」

振り返つて見ても、そこにあるのは暗闇だけ。ぼんやりと足許を照らしていた光も、いつの間にか消えてしまい、まとわりついてくるような闇の中に、ボクだけがポツンと立つている。

「誰か! 誰かいの!」

世界に自分が一人で取り残されたような気になつて、ボクは大声を出した。ここは舞台裏だろ? どんなに広いつていつても、ステージがすぐそばにあるはずなのに。なのに あれだけ騒がしい観客席からの歓声が まったく聞こえて来ない。

「誰か!」

ボクをここに向かわせたお婆さんは、ボクの事を待つている人がいるって言つてたのに、人の気配すら感じられない。

周りの様子が分からぬ。何かにぶつかつたりしないように、ボクは両手を差し出してソロソロと歩き出した。

どこまで……どこまで続いているんだろう、この暗闇は？

暗さに対する恐怖で、ボクの心臓はバクバクいってゐる。怖い。闇がこんなに怖いなんて。

「だ……誰か……」

もうダメだ。誰が待つていつうが、構うもんか。これ以上は進めない。客席に戻ろう。

すでにステージの光は見えない。闇の中で向きを変えても、自分がどこを向いてるのか分からぬ。やつて来た方へ自分の鼻先が向いているのか？ 踏み出した一歩は、ボクをどこへつれて行くのか？ 考え始めると、足を先へ出す事が出来ない。

どうしていいのか分らなくなり、暗闇の中で立ちつくしてしまつたボクは、ただ自分の心臓の音と呼吸音だけを聞いていた。

「どう、お友達は見つかったかい？」

そんなボクの背中に、その声はいきなり降つて來た。

「 つ！」

あわてて振り返つても、後ろには誰もいない。

「どこを見るのさあ？」

声はボクの頭の上から聞こえてくる。頭上を振り仰ぐと、何もない空間にピエロが浮かんでいた。宙に膝を組んで腰かけ、頬杖をついてボクを見下ろしている白い仮面が、暗闇の中に光つてゐる。虚ろに開いているように見える一つの穴の奥の目は、きっと嘲笑つてゐるはずだ。

真つ暗なはずなのに、そこだけライトが当たつてゐるみたいに、ピエロの姿はハッキリとして見えた。

「ねえつてば、お友達を見つける事は、できたのかい、カール？」

からかうようにピエロに言われて、ボクの胸にマックの事が浮か

んだ。

「月夜のサークル」のショーに魅了され、マックの事をすっかり忘れていた。ここへ来てピエロに声をかけられるまで、ボクはマックを思い出しあなかつたんだ。

それに思い当たつて言葉を失くすボクの様子に、楽しそうに語りかけてくる。

「ああ、そんなに気にする事はないよ。君のせいじゃないんだからねえ」

「そうよお。あたし達のショーを見て、心を捕られない人間なんているわけないじゃないの」

別の場所から声がした。目を向ければ、ピエロから離れた所に女の子四人が浮いていた。一番最初にステージに現れた、あの四人の踊り子だ。そろいの髪型、そろいのドレス。同じ目の色、同じ顔立ち。そして、同じ尖つた獣の耳と長いシップ。

「頂くのは、心だけじゃないけどな」

「心なんでもらつても、どうしようもないじゃん」

「そお？ 私はけつこう好きよ」

「やつぱり頂くなら、心臓が一番だ」

「ドキドキ、ワクワクの興奮から、一気に恐怖に突き落とされた、その何とも言えない味わいが堪らないのよねえ」

闇の中、声が聞こえては、次々と姿を現す者達。一人現れるたびに、明かりが増えていく。気が付けば暗闇はどこかへ消え去り、ボクは光の中に立つていた。そしてよつやく、自分がどこにいるのか分かつた。

「え……？ 何で……どうして？」

ボクは舞台裏にいたはずだ。迷路みたいな荷物の間を抜けて、ずっと歩いてきたはずだ。なのに なのにボクは今、ステージのサークルの真ん中にいる。

綱渡りのロープの上に、空中ブランコに、水槽の中に、オリの中に、ステージのあちこちに。つい先程まで、このステージで目を見

張るシヨーを演じていた者達にボクは取り囲まれている。

みんなそれぞれが、人の姿をしているのに……なのに、どこか歪んでいる。

目が、耳が、口が、手が、足が、肌が。

ボクの目の前にいる者達は、どこか人ではない。

「お、お前達は一体、何なんだよ？」

怖い、足がガクガクする。精一杯出した声が、震えているのを気付かれてしまつただろうか？

ただ一人、宙に腰かけていたピエロが、スルリとぼくの近くに降りて来た。表情の分からぬピエロのマスクから逃れるように、自分で知らず後退る。

ボクの様子にクツクツと小さく笑いながら、ピエロは派手なおじぎをして見せる。

「我等こそ『月夜のサークス』のキャスト。この世に住む子供達の想いから生れた、この世のモノならざる者達」

「想いから？　この世のモノならざる？」

「どういう事なんだ？　このサークスは一体？　頭が混乱する。こんな所はイヤだ。こんな場所には、もういたくない。

だんだん迫つて来るようなピエロのマスク。それから逃げ出すために、ステージに背を向けてテントの出口を目指して駆け出した。だけど、出口まで半分もいかないうちに、ボクの横をすごい速さですり抜けていった何かがいる。

出口の前に陣取り、ボクを威嚇しているのは動物達。鋭い角を振り立てている、一角獣<sup>ヨコクン</sup>と一角獣<sup>バイゴン</sup>。大人しく調教師に従つていたトラやヒョウまでもが、ボクにうなり声を浴びせかける。愛らしい姿で芸を披露していたはずの子犬達までが、底知れぬ光を宿した目でボクを見ている。

でも　と、ボクは考えた。あの大きな角や爪や牙にかけられたら、ボクなんかひとたまりもない。けど、子犬に噛まれるぐらいなら、我慢できるかも知れない。

走りながらそう考えて、子犬達の方をチラリと見た。足を五匹の子犬達の方へ向け、ボクはスピードをあげた。そしてボクは、自分が間違っていた事をイヤというほど思い知る羽目になる。

愛らしい姿をしていた子犬達の体が弾けた。本当は違うのかも知れない。でもボクの目には、五匹の子犬の体が膨れ上がり、弾け飛んだように思えたんだ。

ノソリ、と大きな足を踏み出したのは、可愛らしい子犬なんかじやなかつた。ステージの光を反射して、ブルーブラックの毛並みが油膜のようにも見える。大きさは、側にいるトラよりも、一回りも大きいようだ。五匹はいたはずの子犬達は、まるで溶け合つようにな合体して、ひとつになってしまった。

「う、うあああああつ！！」

相手の頭は、ぼくの頭のずっと上にある。口の中に收まりきれずに、左右に曲がった長い歯。燃える炎のように、コラコラと色を変える赤い目。蛇みたいにのたうち回る長い尾が五本。そして、五つの頭部。

スピードに乗っていたボクの体は、立ち止らうとする気持ちについていかず、バランスを崩してしまった。意味もなく両腕をバタつかせ、両足をもつれさせて、ボクは転んでしまった。立ち上がりうとして、何度も失敗してしまった。心と体をつないでいるスイッチが、どこかで食い違ってしまった感じ。

しりもちをついた状態で、ジタバタと虫のようにもがきながら、ゆっくりと下がつて行く。ズリズリと後退するボクの背中に、何かが当たつた。飛び上がり振り向くと、金色に光る猫の瞳にぶつかった。大きな、鋭い、山猫の目。

「みいんな、同じ事を考えるのさ。トラやヒョウにはかなわない。だけど、子犬なら つてさ。残念だったねえ。実はコイツが、一番バイ奴なのさ」

喉の形が違うはずなのに、開いた口から出でてきたのはハッキリとした人間の言葉だ。

驚く事が多過ぎて、ボクの喉はカラカラになつていて。もう、何に驚けばいいのか分らなくなつてしまつた。

「考えるだけ、ムダさあね。逃げられやしないのさ、ここからはね。アンタも、他の子供らと同じよになるしかないんだよ。」

全体的には「猫」のスタイル。なのに、パーシごとに見れば完全な「猫」じゃない。どこかしらに「人間」の部分が混じつている。例えば顔付きが、例えば脚の関節が、例えば骨格が。

ぼくの視線に気が付いた山猫の目が細まつた。

「気になるかい、アタイの事が？ 余裕だねえ。自分の心配をしないよ。これから自分がどうなるのかをさ」

テント全体にライトが灯つた。それまで闇の中に沈んでいた観客席が、光に浮かび上がつた。

そうだ。ボクと同じく、観客席でサーラスを見ていた子供達は？ 顔を挙げたボクは、心臓が口から飛び出る程の恐怖を感じた。

観客席には、さつきまでと同じく多くの子供達が座つていた。何も見ていない、何も聞いていない、何も感じていない、虚ろな目をした子供達の群れ。

「何を……何をしたんだよ？」

声が喉に引っかかる、ヒリつく。

「一体、みんなに何をしたんだよ！？」

自分でもビックリするくらい、大きな声が出た。ボクの中に積もり積もつた恐怖が、怒りになつて体中で暴れ回つている。

「言つただろ？ このサーラスは、この世に住む子供達の想いから生まれたつて。『月夜のサーラス』を望む子供は、等しく興行に招かれる。ただし、チケットを手に入れるためには条件があり、受け取つたからには『代価』を支払わなくてはいけない

低い低い、ピエロの声。感情を殺ぎ取つた、無機質な声。

チケットを求める子供は、同じ想いを胸の中に抱えている

「学校が嫌い」

横から誰かが声をあげた。

「親が嫌い」

後ろから声がかかる。

「家に帰りたくない」

「友達なんかいらない」

「誰も自分を認めてくれない」

「何も面白い事なんかない」

「何をしてもツマラナイ」

ステージに集まつた者達が日々に発する言葉は、目に見えない重さを持つてボクに降りかかつてくる。これは　この言葉は　いつもボクの周りで呟かれる、囁かれる、聞こえてくるものだ。

「人間つてのは、不思議だねえ。この『月夜のサークス』を生み出す程の想いを、その身の内に秘めていると言うのに、簡単に全てを投げ出してしまえる。僕達でさえ、与えられたステージで満足していると言うのに、与えられた世界で満ちると言う事を知らない」

三日月に笑つた目に、涙の描かれたマスク。その仮面の下からこぼれ出る声は、ボクと同じくらいの少年のようでもあり、中年のおじさんのようでもあり、うんと年をとつた老人のようにも聞こえた。甘い毒を含んだピエロの長い話が始まる。

　　一つの世も、子供と言うモノは満ちる事を知らない。

アレはイヤだの、コレは嫌いだと選り好みをし、現実から逃げ出す事ばかり考えている。そんな多くの子供達の想いは、いつしか凝つて空想上のサークスを生み出した。伝説の獣を従えて、永遠の時を旅する者達。面白くもない現実から自分達を救い出し、ここではない、夢の中へ連れて行つてくれる存在として。

生み出された幻のサークスのキャスト達は、あてもなく様々な土地を長い時間旅した。

「サークス」の本分は、人を楽しませる事。人に夢を与える事。だがサークスを求める子供達が望んでいるのは、自身が夢の中の住人になる事。目覚めない夢の世界と現実を取り替える事。

どこへ行つても、子供達の不満は絶える事がなかつた。

『つるさく小言を言う親が嫌いだ』

『勉強、勉強と言う学校が嫌いだ』

『話を聞いてくれない教師が嫌いだ』

『自慢ばかりするクラスメイトが嫌いだ』

『自分が損をする』

『自分ばかりが怒られる』

『自分が認めてもらえないのは、認めようとしない他人が悪い』

『自分のいるべき世界はここではない』

『もつと別の世界があるはずだ』

『自分が王様になれる場所があるはずだ』

『自分がだけの世界があるはずだ』

『面白くないから』

『つまらないから』

『嫌いだから』

『イヤだから』

『だから、こんな世界なんてなくなつてしまえ！』

『こんな世界なんかいらない！』

多くの子供達の吐き出す「不平」「不満」と言う名のマイナスのエネルギーは、途切れる事なくサークスへと流れ込み続けた。「現実」から逃れるために創り出した、空想上の幻のサークスに。そしてサークスは、徐々に姿形を持つようになつていった。

子供達からマイナスの感情を与えられるたびに、テントやステージや客席も実体を得ていく。いつしか幻のサークスは、半分実体を持ち、半分幻のまま都市伝説のように子供から子供へ語り継がれていった。

そうこうするうちに、サークスのキャスト達は気が付いた。自分達が『魂』を得た事に。多くの子供達が発する不平・不満・不安といった恐ろしい程大きくて、怖ろしい程強いマイナスのエネルギーから芽吹いた、暗い闇の『魂』を。それと同時に、全てのキャスト、

全ての動物、全ての設備、品物、小道具にいたるまでが、完全な実体を得た。

満月の夜に興行をする「月夜のサークル」の誕生だ。

「そう。子供らの想いが大きければ大きい程、強ければ強い程、我等サークルの力も強くなつていいくと言つ訳さ」

ピエロの長い話を、ボクは呆然と聞いていた。信じられない……。子供達の空想から生まれた幻のサークルが、実体を持ち、魂を得たなんて。

「信じられない」つて、君の目が言つてるよ。まあ、当たり前だよ。それが自然な反応さ。だけどね……」

ピエロは言葉を切ると、観客席をぐるりと指差した。

「ここにいるお客様方にとっては、僕の話は意外でもなんでもない。だつてみんなは、『現実ではない』事を望んでサークル《ココ》へ来たんだから」

現実から逃げるために、気に入らないモノを切り捨てるために、客席の子供達はサークルへやつて來たんだ。

「我々『月夜のサークル』はね、魂と実体を手に入れてからと言つもの、精力的に動き回つたよ。子供達の望むままに、求める声があれば、どこへでも行つたよ。僕らが興行するのは、満月の夜一度だけ。それでも休みがないくらい、頑張つてるんだぜ。ホメて欲しいくらいだよ」

その満月の夜、一度しかないチャンスをボクも願つてた。

「おかげでこのサークルも、あちこち傷みが激しくてねえ。だからさ、僕らも考えたんだ。ほら、何事にも『代価』つてヤツは必要だろ? 人間のサークルだつて、チケットを手に入れるためには代金を払うじゃないか。それと同じさ。『月夜のサークル』を呼び出してさ、しかもチケットまで手に入れたんだ。それに見合つだけのモノを『代価』として支払つてもらうのは、当たり前のことだろ? 仮面のピエロが差し上げた手の指を、パチリと鳴らした。途端に

観客席の照明が一斉に消える。驚いてそちらにボクが視線を移すと、再び客席に明かりが戻った。だけど、そこにね……。

「そんな ！？」

客席には誰も座つていなかつた。ほんの数秒間、明かりが消えていただけのはずなのに。なのに、広い観客席には誰の姿もない。床にお尻をついた姿勢のままだつたボクは、思わず立ち上がりテント内を見回した。あれだけいた客席の子供達は、一体どこへ？「ふふ。何度も言つたじゃないか。それなりの『代価』を支払つてもらつて」

「どいくどいく行つたんだ？ みんなをどいくへやつたんだよー？」

一瞬、我を忘れたボクは、ピエロに向かつて掴みかかつてしまつた。そんなボクの手をヒラリと軽く飛んでかわしたピエロは、含みのある楽しそうな声で言つた。

「だから『代価』だよ。この『月夜のサークัส』じゃあ、現実の通貨は通用しないよ。ここを利用できるのは『魂』と『心臓』と『身体』だ。チケットを手にした子供は、一人の例外もなく全部支払つてもらひ」

「魂」と「心臓」と「身体」？ 分りたくないが、「魂」は何となく分る。「心臓」だつて、嫌な話だけど理解できるよつた気がする。でも「身体」つていうのは何だ？ 意味が分らない。

「不思議かい？ カール。君は特別だから、教えてあげるよ」

またピエロが近付いて来る。仮面の下の素顔は、どんな表情をしているんだろう？ 瞳は何色をしているんだろう？

「彼等の『魂』は僕等、サークัสのキャストのものだ。彼等の『心臓』は幻獣達のもの。そして彼等の『身体』はマザーのものなのさ」マザー？ マザーつて何だよ？ 誰の事を言つてんだろう？

「そう言えばカール、君はもう、マザーと会つたよね」

「ボクが？ 会つてる？ マザーと？」

「そんなはずは」

「会つてこるや。テントの入口でね。さつきも会つてこりやないか。君をここへ来るよう誘つた人物がいるだろ？」「.

テントの入口で、客席で。このテントに来てからボクに声をかけたのは、フードをかぶったお婆さんだけだ。じゃあ、あの小さなお婆さんが「マザー」？

「思い出したかい？ 彼女はマザー。この『月夜のサークス』が生まれ出る事になったきつかけは、彼女にあるんだから」「きつかけ……？」

「おつとつと。そこまでは、教えてやれないよ。もつ時間もないみたいだしね。僕等も動物達も、いい加減、お腹が空いてるんだから

ら

ピヒロがそう言つた時、舞台正面に設置されているカーテンが開いた。奥からワゴンを押した、フードで顔を隠した小柄な人物が現われた。ワゴンの上に載つているのは銀のボウルと、金色に光る大きな皿。どちらにも白い布がかけられている。

「さあさ、お待たせしてしまったようだね。腹が減つたろ？」「

あのお婆さんだ。顔は見えないけど、声が同じだ。と言つ事は、あの人マザーなんだ。

ステージ上にいた者達の視線が、ワゴンの皿に集中した。さつきまでの嘲りを含んだ表情じやない。期待を込めた熱っぽい目で、皿の皿を見つめている。

テントの出口でボクを見張つていた幻獣達も同じように、ワゴンの方を熱心に見ている。

「どれ、こらえの効かない連中から先にした方が良さそうだ」

「マザー、そりやないよ。アタイ達だつてずい分と待つたんだ。もう我慢できないよ」

「そうだよ、マザー。オレ達にも早く」

ワゴンから銀のボウルを持ち上げ、幻獣の方へ歩き出したお婆さんに向かって、キヤストが次々と言葉をかけた。

「仕方がないねえ。あんまりガツつくんじゃないよ。みつともない

からね「

お婆さんが小さくうなづくと、ワゴンの側に歩み寄ったピエロが皿の上の布を取り払った。

金色の皿の上に盛られていたのは、様々な光を放つ大粒のビー玉に見えた。赤に青に黄色、紫やピンクや何とも言葉にできないような色をしているものまで。

その光るビー玉を皿にした瞬間、ほうつというため息がボクの周りでもれた。吸い寄せられるみたいにして、みんなフラフラとワゴンに群がつた。我先に手を伸ばすと、それぞれが光るビー玉をつまみ上げた。

半人半獣の四人の少女も、炎を吹く大男も、山猫の娘も水槽の中のウロコを持つ男達も、全員がウツトリとした顔で、手の中の光る玉を見ている。

「見てごらんよ、カール。キレイだらう」

ピエロも皿の上からビー玉をつまみ上げ、ステージの照明にかざしながらボクに見せた。

「な、何だよ。それがどうしたって言つんだよ。そんなの、ただのビー玉じゃないか」

震える声を必死になつて絞り出して、ボクは精一杯強がつて見せた。

「ビー玉？ これがただのビー玉？」

ピエロが甲高い声でボクを嘲笑わらつた。他のキャストもクスクスとボクを嘲笑う。

「お前さんの皿には、これがビー玉に見えるんだなあ。本当に『人間』つてのはバカだよ。ビー玉なんかじゃあ」

軽業師の男が瞳のない いや、瞳だけしかないのか？ 暗闇みたいな目を細めて、ボクを嘲笑つた。指でつまんだビー玉を、口に含んで舌の上で転がす。

「食べやしないだろ？」「

奥歯で噛みしめたんだろう。カリリ、と硬い音がする。

食える？ 食べるのか、アレを？

「カール、カール。君は何を聞いていたんだい？ 僕等キャストの取り分は『魂』だつて言つたじやないか。もつ忘れちゃつたのかい？」

楽しそうだ。この上もなく面白い遊びを見つけた子供……そう、まるで子供みたいに楽しそうだ。幼くて、無垢で、それでいて……残酷。

じゃあ……ここにあるのが「魂」だとすれば……。あのお婆さんが持つっていた、銀のボウルの中身は……。

体中の間接がサビついてしまった感じ。言つ事を利かない自分の体をはげまし、どうにか後ろを振り向いた。背中にも目があつたら、こんなに苦労しなくとも済むのに。そんな、どうでもいい事を考えてしまつ。

骨張つた細い指が、ボウルにかけられていた布を払つた。途端に金属じみた二オイがボクの鼻を刺激する。

とても身近で、なつかしくて、なじみのある二オイ。例えれば、公園のブランコのチョークを長い間握つていた手の平に残る、あの独特に二オイ。鼻につくのに、不思議と不快じやなかつた、あの二オイ。

でも、この空間に流れる二オイの強さは……。

ソワソワと落ち着きなく脚を踏み替え、鼻息を荒くしている幻獣、猛獣の目の前でボウルに手を突つ込み、何かをつかみ出した。

「気になるかえ、坊や。お前さんが考へてゐる事で、間違つちやいないよ」

低くしわがれた声。かわいて力サカサになつた肌。縮んで小さくなつてしまつたように思える、歪んだ体。

そんな事よりも、ボクの視線を奪つてやまないのは、お婆さんの手の中にある物体の方だ。

手の平より一回り小さな、丸くて、赤くて、弾力があるように見えるし、脈打つてゐるようにも見える。

獣達の田も、お婆さんの手の中にあるモノに釘付けになっている。せわしなく、床を爪や蹄で引っかきながら、ソレが自分の足元に投げ寄こされるのを今か今かと待っている。

お婆さんは薄い肩を震わせて笑っている。そうして 手に持つていたモノを投げ与えた。期待を込めて見つめる、視線の群の中心に。まだ体温が残つていそうな程、ツヤとハリを持ったままの子供の「心臓」を……。

幻獣、猛獣達の田の色が変わった。投げ込まれた新鮮な心臓に、我先にとかぶり付く。うなり声と唾液、飛び散る血。

思わずボクは口を押さえた。吐き気がする。今、獣達がむさぼり食つているのは、さつきまでボクの隣りで、すぐ側で、サークスのショーを見ながら歓声を挙げていた子供達の 心臓なんだ。

「なんで……」

声が上手く出ない。喉にからんだものが、声を出そうとするボクの邪魔をする。

「なんで、こんな事するんだよ！」

涙が出てくる。口の中に酸っぱい味が広がる。胸がムカムカする。「案外、頭が悪いんだな、カール。君達の世界だつて同じじゃないか。何かを手に入れたら、それに見合つだけのモノを支払うだろう？ 僕等は人間の社会から、このシステムを学んだんだよ。君達はチケットを手に入れ、サークスのショーを楽しんだ。自分の住む現実から逃げ出し、別の世界へ行きたいと願つた。自分のありのままを正當に評価して欲しいと願つた。その全てを、自分は何も失わずに叶えてもらおうなんて、そりや虫が良すぎる話じゃないか」

肩をすくめ、大げさに両手を広げながら、ピエロは駄々つ子に言い含めるようにボクに語る。

「だからと言つて、そんな事、誰も考えてなかつたはずだよ！ サークスに来る事で、自分の命まで取られるなんて。そんな事、考へるはずないじゃないか！」

そうだ。誰が考えるもんか。いくらこの世界から逃げ出したいか

らつて、自分の命を投げ出すヤツなんかいるはずない！

「命を取る？ あつは、カール、君は何かカン違いしているよ」

「カン違い？ 何をカン違いしてるって言うんだ！？」

「確かに僕等は子供達の『心臓』と『魂』をもらうよ。大事な僕等の力の『源』だからね。だけど、マザーの扱う『身体』は違う。子供達はマザーの手で、このサークスの一部に生まれ変わるんだ」

生まれ変わる？ サークスの一部になつて？ ダメだ。意味が分らない。

ピエロの顔が白い仮面の下で、ニヤリと笑つた気がした。多分、いやきっと、本当に笑つてゐるはずだ。

「最近の子供は、よほどこの世界が嫌いらしいね。僕等『月夜のサークス』がテントをかけるのは、満月の夜だけ。それでも、休みなしに動き回つていてさ。あちこち傷むのが早いんだよね」

顔をあげて、テントの中をグルリと見回す。

「僕等を求める子供達は、みんな自分の現実から逃げたがつてている。この『月夜のサークス』と一緒に、終らない夢の中できつて行きたいと願つてゐる。だけど、人間のままでその望みは叶えられない。だからマザーに姿を変えてもらつんだ。そうする事で、彼等は望み通り『月夜のサークス』と永遠を旅する事が出来る。サークスの一部となつてね」

ボクはゾッとして、テントのあちこちに視線を走らせた。ピエロの言う通りだとしたら、あの座席も、あの数々の道具も、ステージの上にある器具も、それどころか、このテントそのものが 人間の子供の 観客の成れの果て？

ハツとした。じゃあ、マックも心臓と魂を抜かれて、このサークスの一部にされてしまつたつて事なのか？

「マックは！？ お前等、マックの心臓と魂も食つたのかよ？ マックをどうしたんだよ！」

カツと頭に血が昇つたボクは、思わずピエロにつかみかかつた。

「ああ、あの子かい。今時、珍しいくらい見事な魂だつたねえ。昨今の子供等は、見栄やら自尊心ばかり強くて中身のない、テントの電飾程にしか使えないのが多いんだけど、あの子は違つたよ」

答えたのは、マザーと呼ばれたお婆さんだ。

「やっぱりマックも、お前等が……！」

さらに力を込めたボクの手を、ピエロがスッと外した。  
「君はマックの事を大事、大事つて言つけれど、それなら君は知つてゐるのかい。どうしてマックがこのサークスに来たのか。彼が何から逃げるためにこの場所を求めたのか、君は知つてゐるのかい？」  
思つても見なかつた問いに、ボクの頭の中は真つ白になる。上げたままの腕を下ろす事もできず、固まつてしまつ。

マックはいつも明るくて、頭が良くて、ボクの事を助けてくれた。強くて、頼りがいがあつて、家族の仲だつて悪くなかつたはずだ。そりや、たまにはおばさんに文句を言つてる時もあつたけど、そんなの本気じやなかつたはずだ。学校でだつて思い当たる事はない。分らない。どうしてマックは、こんなサークスへ来たんだろう？ 黙りこくつてしまつたボクに、サークスのキャスト達は悪意に満ちた嘲笑い声を浴びせかけてきた。

「おいおい、カール。君はマックの親友なんだろう？ 自分の親友が何を考えていたのかも、知らなかつたつて言つのかい？」

何を言われても、分らないものは分らない。言い返すこともできず、ボクは力なく腕を下ろすと、唇を噛んでうつむいた。

「まあ、そんなに落ち込む事はないさ。それだけマックは心を隠していたつて訳なんだから」

うつむいた視界の端に、近付いて来るピエロの靴先が見えた。その靴先から少しでも離れようと足を動かしかけた時、ボクの頬に冷たい指先が触れた。

力が入つたようにも思えないのに、その指の動きに逆らう事がで

「ボクの大事な友達のマックを、こいつらは食つちまつたんだ。このバケモノサークスの連中が。」

きない。ボクをのぞき込む仮面の下のピエロの目とぶつかった。

「泣き虫カール、弱虫カール。君に教えてあげるよ。マックはね

」

ピエロの声が変わった。

「マックはね、カール。君から逃げたのさ。いつでもマックの後ろについて、何でもマックに頼つて、マックがいなければ何も決められない、何もできない。そんな君から逃げ出したくて、マックはここへやつて来たのさ」

頭を……殴られたようなショックだった。マックが、ボクの事をそんな風に思つていたなんて。

いつだつてボクを助けてくれた。いつだつてボクをかばってくれた。だからボクは マックに頼り切つていたんだ。

マックがいてくれれば、それで良かつた。ボクの代わりに考へてくれる。ボクの代わりに話をしてくれる。ボクの代わりに……。マックの後ろにくつづいて、マックに寄りかかって、それでいいと思つていたんだ。

マックはそんなボクから逃げ出すために、「月夜のサークス」を求めて、チケットを手に入れた。そして 。

「……サークスの一部になつちゃつたって……言うのか……」

体中から力が抜ける。ボクはその場にへナへナと崩れ落ちそうになる。カツコ悪くへたり込んでしまわるのは、左右からボクの頬に触れている冷たい指のおかげかも知れない。

「臆病なカール。それでも君はマックを探して、ココへ来た。どうだい、カール。マックに会いたいかい？」

気味悪い程の猫なで声で、ピエロが問い合わせてきた。ノロノロと顔を上げる。悔しくてあふれた涙で、視界がにじむ。

「マックに？」

頭が上手く働かない。

「会わせてあげてもいいよ。君は特別だからね」

「そうだ……。何度も聞いた。ボクが「特別」って、どういう事だ

る。「

「せつかくこの『月夜のサークス』まで来たんだ。『じょりびこマック』に会わせてあげるよ」

「マックに……会える?」

ぼんやりと同じ言葉を繰り返すボクの片頬を、温度のない手がピタピタと叩いた。その時になつてボクは、目の前にいるピエロが自分と同じ位の背丈である事や、細い指が手袋に包まれている事に気が付いた。

ボクの右頬に触れている左手は白。左頬に当たられている右手は黒。思つていた程大きくない、黒手袋が白い仮面のアゴにかけられた。対照的な白と黒がキレイだ、なんて考えてしまう。

涙の描かれた三日月形の目。温かみのない笑みを刻んだ、吊りあがつた口。ゆつくりと仮面が外されていく。

「カール、よく見て」

完全に仮面が外れた。ボクの目は、仮面の下のピエロの素顔に釘付けになつた。

そんな こんなはず、ない。

「人一倍怖がりなのに、ぼくを探しに来てくれたんだね。嬉しいよ、

カール」

ガラス玉みたいな虚ろな瞳をした、口許だけで作られた笑顔を浮かべた……マックがそこに、マクレイン・ホートマンがそこに立っていた。黒い手袋に包まれた右手に、ピエロの白い仮面を持つて。

「マック……君は……」

ボクから逃げ出すために、そのために口々く来て、そして。

「言つたまう。『傷むのが早い』って。定期的に取り替える必要があるのや」

マックではない。今の言葉を発したのは、彼の右手に掲げられたピエロのマスクだ。

「彼のボディは、僕にピッタリだ。まったく、素晴らしいよ」

「ピエロ」が語っている間、マックの表情は変わらなかつた。そう、

ショーウィンドウの奥に立っている、お仕着せのマネキンをつくりだ。

「マック、マック……。『めんよ、マック

ボクが弱虫だったから。ボクが君に頼りっぱなしだったから。だから、君は

「『めん、ごめんよ、マック

涙が止まらない。謝つても謝つても、謝り足りないくらいだ。

白黒の手袋が離れたボクの体は、支えを失つてその場にガクリと膝をついた。

「ボクのせいだ。ボクのせいだ……」

「カール、カール、もういいんだ。ぼくは何も気にしないよ。今はとてもいい気分なんだ。君を恨むどころか、逆に感謝したいくらいだよ」

マックがボクにかけた言葉は、思いもよらないものだつた。

「感謝？ 何でさ？ だって君は

「そう。ぼくは『月夜のサークス』の一員となつた。もう何も悩まなくてすむし、悲しい事も、苦しい事もなくなつたんだ。人間である事をやめて、永遠に旅する存在になれたんだから」

マックが……マックだったモノが語る言葉が、ゆっくりとボクの心を染めていく。ボクの考えを奪い、ボクの魂をしごれさせていく。

「さあ、カール。君も一緒に行こう。ぼくと一緒に、夜を旅しよう。

『月夜のサークス』は君を歓迎するよ」

打ち砕かれてしまつたボクの心は、目の前に差し出された白い手袋に包まれたマックの手に、屈服した。

しごれた頭でボクは、まぶしくさえ感じられるその白い手袋に自分の手を重ねた。

「さあ、みんな。新しい仲間の誕生だ！」

呆けたように……もしかしたら、薄く笑顔さえ浮かべていたかも知れない……ボクはマックを見上げた。でも、ボクの目に映つたのは、大好きなマックの笑顔ではなく、不気味に嘲笑ついているピエロ

の仮面だった。瞬間、ボクは自分が取り返しのつかない選択をしてしまった事に気が付いた。

「マザー、彼に相応しい、新しい姿を与えてあげておくれ」

実際に楽しそうな声が、仮面の奥から聞こえてきた。同時に、ボクは背後に人の気配を感じた。

「そうさねえ。この子には操り人形マリオネットにでもなつてもらおうか。自分では何も決められないこの子には、誰かの手を借りなければ立ち上がる事さえできない操り人形こそが、一番相応しいだろうよ」

耳元に吹き込まれる、低くてしわがれた声。そして両肩をつかむ骨張った手。逃げ出したいのに、ボクの肩をつかむ細い手は思いの外強くて振りほどくことができない。

ピエロの白い手袋が、ボクのへその辺りに当たられる。そして黒い手袋がボクの胸に。

「大丈夫。誰も君の事なんて憶えちゃいない。友達も、学校の先生も、君のパパとママでさえね。この世界に『カール・クレイトン』って名前の子供がいた事なんて、最初からなかつた事になるんだからね。だから安心して」

ピエロの両手が動く。

「人形になっちゃいな」

すうすうと全身から力が抜けていく。視界が徐々にかすんでくる。「みんなと同じように、君にもちゃんと『代価』を支払つてもらうよ」

かけられるピエロの声が、どこか遠くから聞こえてくるような気がする。だんだんと暗くなつていくボクの目に最後に映つたのは、白い手袋の上の光る大粒のビー玉と、黒い手袋の上で脈打つている赤い心臓。

「確かに、頂戴いたしました」

ボクの それはボクの心臓だ。そして、ボクの魂。

返して！ 返してくれ！

何か言おうにも、もう口を開く事もできない。

「お前さんは、いい人形になりそうだよ」

耳に囁かれた声は、これまでのお婆さんのものとは違つた若い女性のものだった。

「マザー。この『魂』は、貴女の取り分だよ」

もう、かすかにしか見えない。ただ、何事かの行われている気配だけが、肌に伝わつてくる。視界が奪われた事で、敏感になつた耳がかすかな音を拾つ。満足そうに喉の鳴る音。ボクの「魂」を飲み込んだ音。

「ああ……。やつぱり、この子の『魂』の味は特別だよ。お前さんが目をつけただけあるね。程よく『恐怖』と『後悔』が混じり合つて、なかなかのもんだよ」

ボクの後ろにいるのは、お婆さんはすなのに。なのに、聞こえてくる声はさつきまでのしわがれたものとは違つ。まるで……そう、まるで若返つたみたいだ。そしてこれが、ボクの聞いた最後の言葉になつた。

狭くなつたボクの視界が、完全にふさがれてしまった。背後から広げられた「マザー」のマントがボクを包み込んだんだと、それだけは理解できたけど……それだけだった。

「ボク」という存在は 消えてしまった。

ねえ、知ってる? 満月の夜にだけ現れる「月夜のサークス」の話。

そこに行くには、特別なチケットが必要なんだつて。

新月の夜に、サークスのピエロが配るチケットを手に入れれば、

「月夜のサークス」に行けるって話だよ。

でもね。

サークスに行つた子供は、戻つて来ないつてウワサだよ。ああ、でも、あくまでもウワサだからね。本当かどうかは分からないよ?

「さあや、お立ち会い。」当地初お目見えの『月夜のサーラス』で  
『じでこ』います。面白くない現実に飽き飽きしている、お坊ちゃん、お  
嬢ちゃん方。どうぞサーラスにおいでなさいな。見た事もない、夢  
のような舞台を『じ覧に入れますよ。」

月のない夜。星の光に照らされて、白い仮面のペニロは壁わきづ。  
その腕に哀しい顔をしたマリオネットを抱えて。

世界中、毎日どこかで月が死に、毎日どこかで月が満ちる。

「今宵はこの街が、明日はあの町が。我等『月夜のサーラス』は、  
毎夜踊つておりますよ。あなたもいらしてみませんか？ ただし、  
お代はキッチリ頂きますがね」

FHN

## （後書き）

この作品は、拙サイトにリンクしていただいております「つりやまのひみつき」管理人、漣さまのイラストに触発されて書き出したものです。

当初は〇〇の予定だったのですが、すっかり短編の様相に。  
教訓「〇〇はブラウザ上で勢いをつけて書くべし」  
何はともあれ、書き上げることができ一安心です。  
最後になりますが、作品から小説を書上げる事を快諾してくださつた漣さま、本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5737v/>

---

月下に踊るピエロ

2011年8月8日03時39分発行